各会場
入場無料

東日本大震災パネル展
「被災地」福島
十二人の12年

原発事故に遭った12市町村で
暮らす人たちの今ここ

12のまち、交差する12の人生

2011年３月の東日本大震災、福島第一原発事故から間もなく13年。避難指示が出されるなどした福島県の12市町村※は現在、帰還困難区域を除いて全ての自治体で居住が可能になっています。

当地には様々な課題と向き合いながらも、気負いなく暮らす帰還住民や移住者たちの日常があり、「新しいまち」の風景を構成しています。

本パネル展では、各市町村から１人ずつ人物を取り上げ、事故後12年の生きざまを振り返りつつ、被災地域の今を伝えます。

※田村市・南相馬市・川俣町・広野町・楢葉町・富岡町・川内村・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯舘村

photo／太平洋と福島第二原発を望むとみおかワインドメーヌのブドウ畑（富岡町）

東京展

2024. 2/3(土)▸2/9(金)
9:00-17:00（最終日は14:00まで）
会場：隅田公園リバーサイドギャラリー
東京都台東区花川戸１丁目1-1　※浅草・吾妻橋のたもと

2/10(土) 14:00～ クラフトビレッジ西小山（東京都目黒区原町1-7-8）で トークイベント開催

福島展

2024. 2/16(金)▸2/22(木)
9:00-17:00
（最終日は15:00まで）
2/17(土)は11:00-17:00、2/18(日)は休館
会場：福島大学附属図書館
福島市金谷川1

岩手展

2024. 3/2(土)▸3/11(月) 3/5(火)は休館
9:00-22:00（最終日は15:00まで）
会場：大槌町文化交流センターおしゃっち
岩手県上閉伊郡大槌町末広町1-15

3/9(土) 14:00～ おしゃっち多目的ホールで トークイベント開催

主催
福島大学地域未来デザインセンター
相双地域支援サテライト

相双地域支援サテライトは福島第一原発事故の被災地域と福島大学とをつなぐ現地の拠点として、2012年6月、川内村に開設。現在は富岡サテライトと浪江サテライトに職員を配置し、被災12市町村を対象とした支援活動を行っています。

So So Good
相双地域支援サテライト
キャラクター
そうそうくん

お問い合わせ
福島大学地域未来デザインセンター・相双地域支援サテライト（富岡サテライト）
〒979-1112 福島県双葉郡富岡町中央２丁目83 とみおかワーキングベースＪ号室　TEL：0240-23-6675　e-mail：r411@ipc.fukushima-u.ac.jp

「被災地」福島の12年

十二人

原発事故に遭った12市町村で暮らす人たちの今ここ

2011年3月11日の東日本大震災から13年が経ちます。

福島の大地は、これまでに誰も経験したことのない原子力災害に見舞われ、2万人以上の住民が今も県内外に避難を余儀なくされています。

避難指示が出されるなどした自治体は、過酷事故を起こした東京電力福島第一原子力発電所が立地の浜通り地方を中心とする次の12市町村。

〈田村市・南相馬市・川俣町・広野町・楢葉町・富岡町・川内村・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯舘村〉

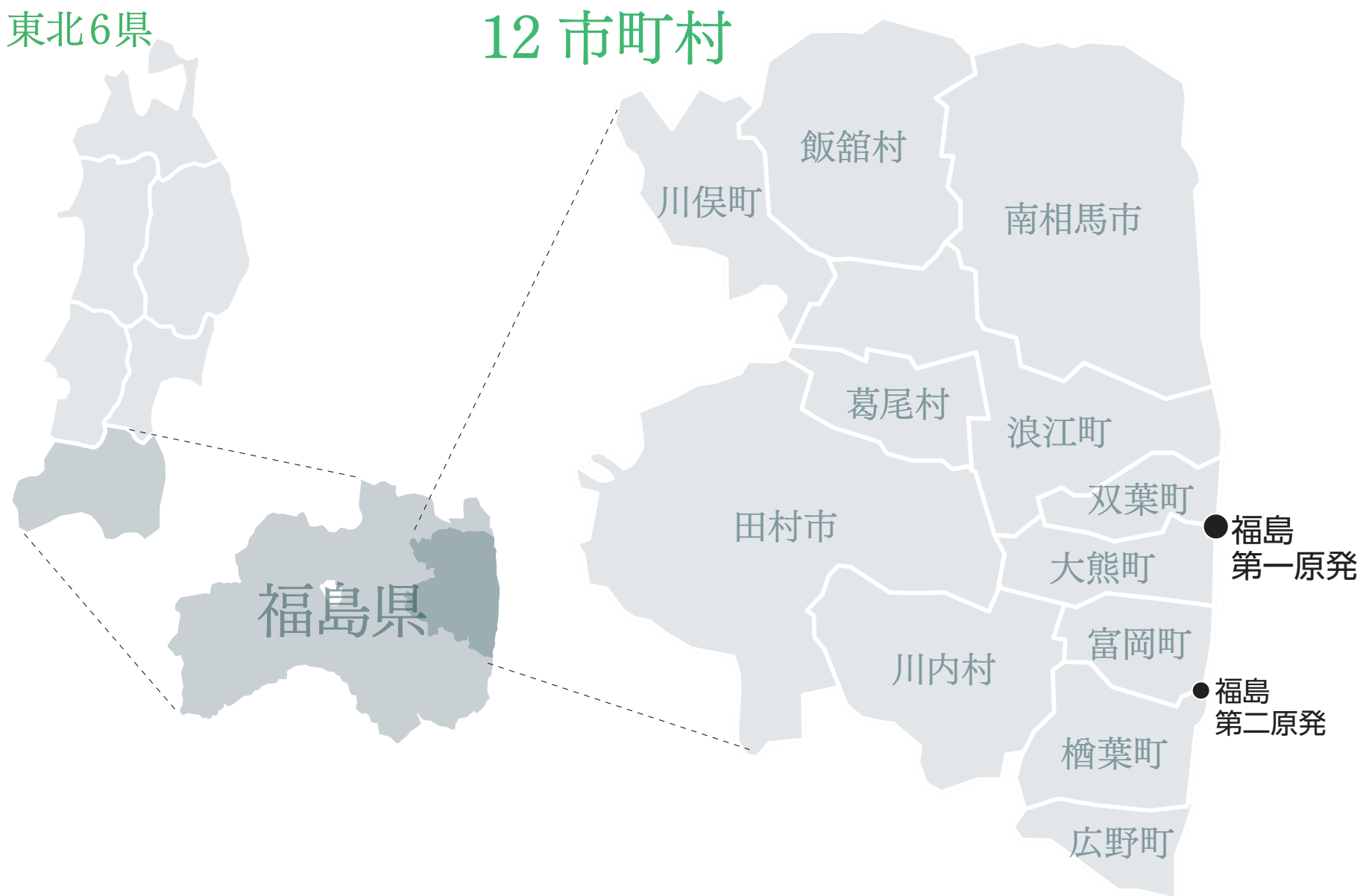
この間、避難区域の解除が進み、全ての自治体で居住が可能になりましたが、いまだに立ち入りが認められない「帰還困難区域」も残ったままです。

23年8月には福島第一原発にたまる「処理水」の海洋放出が始まり、当地は国内外から大きな注目を浴びました。しかしながら、いわゆる「被災12市町村」に住む普通の人たちの暮らしはどれほど知られているでしょうか。

避難指示が解かれるや否やすぐに帰還した人、新天地を求めて外からやって来た人、そして、逃れずに古里に留まり続けた人…。

本展では様々な事情を抱えたり、課題に向き合ったりしながら、「被災地」と呼ばれるまちで生きる12人の皆さんの「あの頃と今」を紹介します。思い出やお気に入りの場所で写真に収まってもらい、事故後12年を振り返るドキュメントを添えました。

主催　福島大学地域未来デザインセンター 相双地域支援サテライト



福島12市町村 あの日からこれまで

今も2.6万人超が避難

2011年3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、12市町村で震度5強から6強を観測した。この地震による大津波が沿岸各地を襲い、富岡町では21㍍の最大波を記録。23年8月現在、12市町村で736人が犠牲になり、長引く避難生活などが影響した震災関連死は2125人に上る。全壊家屋は4229棟。南相馬市は津波などによる直接死と関連死を合わせた死者が1156人を数え、県内で最も多い。関連死は県全体で2337人であり、470人の岩手県や931人の宮城県と比べて突出している(両県は23年3月現在)。

福島第一原発で水素爆発を起こした1号機(中央左)と3、4号機(同右奥)=2011年3月15日撮影、東京電力HD提供

2023年11月30日、富岡町小良ケ浜、深谷両地区の復興拠点で集会所や共同墓地、それらに通じる道路の避難指示が解除され、ゲートが開いた=富岡町提供

双葉町と大熊町にまたがって立地する東京電力福島第一原子力発電所は、震災で外部電源と非常用電源を喪失。12～15日、冷却不能となった原子炉が相次いで水素爆発を起こし、広範囲に放射性物質が拡散する過酷事故に至った。

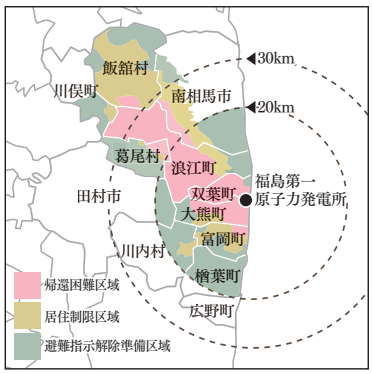
第一原発から半径20㌔圏内に避難指示が出され、4月には警戒区域と計画的避難区域、緊急時避難準備区域が設定された。年間の積算放射線量に応じ、翌12年4月に避難指示解除準備区域(20㍉シーベルト以下になることが確実)と居住制限区域(20～50㍉シーベルト)、帰還困難区域(50㍉シーベルト超)の三つに再編。その後、14年4月の田村市都路町に始まり、川内村や浪江町、富岡町、双葉町などで徐々に避難指示が解除され、現在は帰還困難区域だけが残る。

同区域内で除染やインフラ整備などを先行して進める特定復興再生拠点区域(復興拠点)は6町村、2747㌶に設定され、23年11月(富岡町)までに全ての復興拠点で避難指示が解除された。

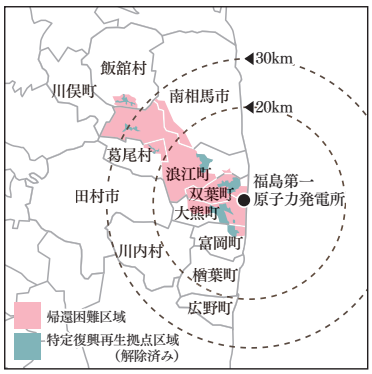
12市町村の総面積約2080平方㌔㍍で帰還困難区域は東京ディズニーランド約665個分の309平方㌔㍍を占め、県土の約2.2%に当たる。23年8月現在で県内外に2万6801人が避難を余儀なくされている。

■避難指示区域の変遷

避難指示区域の設定
(2011年4月22日)



区域再編
(2013年8月8日時点)



進む避難指示解除
(2023年11月30日現在)

相双地域支援サテライト

福島大学地域未来デザインセンター

震災から1年余りが経過した2012年6月、川内村に被災地域支援の現地拠点として設置。その後、被災地域の避難指示が解除され住民の帰還が進む中で活動拠点を順次移転し、現在は福島大学のほか富岡町と浪江町にサテライトを設置し、被災12市町村を対象とした支援活動を行っています。サテライトのスタッフは福島県から任命された復興支援専門員で、地域復興支援、教育環境整備、企画・連携の3業務を分担して活動しています。

■支援対象市町村

田村市・南相馬市・川俣町・広野町・楢葉町・富岡町・川内村・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯舘村

■沿革

2012年6月	川内村に「いわき・相双地域支援サテライト」開設
2015年8月	同サテライトを楢葉町に移転
2016年4月	「いわき・相双地域支援サテライト」を「相双地域支援サテライト」に改称
2017年5月	南相馬市に「南相馬分室」開設
2020年8月	楢葉町の同サテライトを富岡町に移転
2021年4月	川内分室、南相馬分室を閉鎖し浪江町にサテライトを新設。「富岡サテライト」「浪江サテライト」と呼称

■所在地

金谷川キャンパス
福島市金谷川1　福島大学地域未来デザインセンター

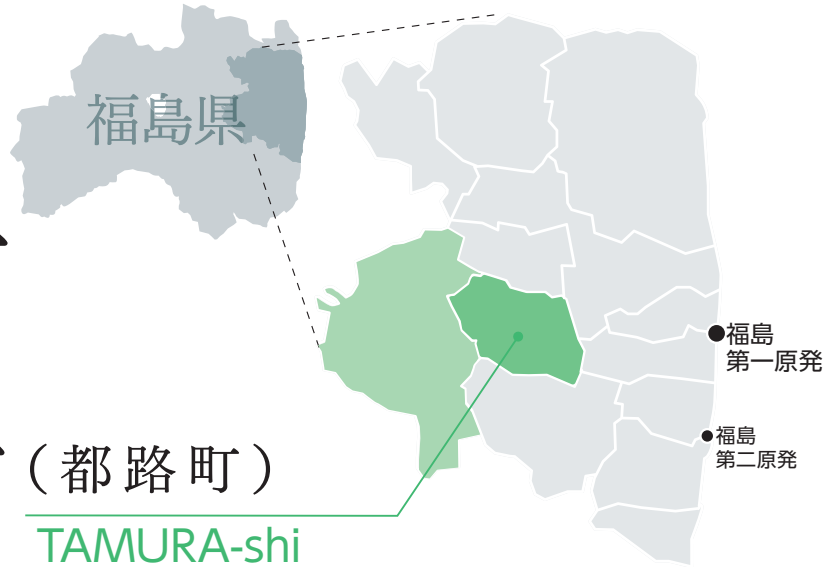
富岡サテライト
双葉郡富岡町中央2丁目83 とみおかワーキングベースJ号室

浪江サテライト
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7番地2（浪江町役場内）

ホームページ　https://satellite.net.fukushima-u.ac.jp/

田村市（都路町）

TAMURA-shi



阿武隈高地で自然豊か

2005年に滝根町、大越町、都路村、常葉町、船引町の5町村が合併し誕生。中通りの最東端、阿武隈高地のほぼ中央に位置する。南北に阿武隈山系の山々が連なる中山間地域で、鍾乳洞のあぶくま洞をはじめ豊かな自然環境が観光資源になっている。東部の都路町は原発事故で避難指示が出されたが、14年4月に全て解除された。その後、地ビールメーカーや植物工場が誘致されるなど、新たな産業が育つ。

面　　積（田村市）	458.33㎢
住民登録人口（田村市）	16322人（2023年11月現在）
居住人口（都路町）	1829人（2023年10月現在）
震災前の人口（都路町）	3001人（2011年3月時点）
空間線量	毎時0.13マイクロシーベルト （市立都路こども園、2023年12月測定） ※避難指示解除の目安は毎時3.8マイクロシーベルト

あの日からこれまで

都路で誘致企業活躍

都路町は震度6弱を記録。福島第一原発が過酷事故を起こした3月12日、国は半径20キロ圏に避難指示を出し、都路町の一部が含まれたが、田村市の判断で町全域に避難指示を出した。

4月、同町は警戒区域と緊急時避難準備区域に指定され、9月に後者が解除、翌2012年4月に前者が解除されて避難指示解除準備区域に再編された。さらに14年4月には同準備区域も解除され、居住が可能に。同年にこども園、三つの小中学校が再開した。17年、古道小、岩井沢小の2校は統合され、都路小学校が開校した。

同町はコンビニエンスストア（15年）や商工会による洋菓子店「みやこじスイーツゆい」（16年）の開業、市営都路団地（同）の供用開始など、順次、商業施設や住環境が整った。20年には誘致企業のホップジャパンが地産ホップを原料とするクラフトビールの醸造所を、A-Plusが葉菜の植物工場を稼働させた。

21年、震災の影響で閉じていたグリーンパーク都路のオートキャンプ場が再開した。

PENNSYLVANIA
1984
SPORTS
EST.
USA
KEYSTONE STATE

田村市 都路町

河本　凪紗さん

（1996年 大阪府高石市生まれ）
「ホップジャパン」広報

震災経た福島は一つの「国」

東京暮らしで折れた心を癒やしてくれたのは、町で育てたホップで香り高いビールを醸すブルワリー（醸造所）と温かな土地の人たちだった。2016年の熊本地震で学生ボランティアを経験して東日本大震災に思いをはせ、インターンの地に福島を選んだ。卒業後、都心の他社に勤めたが激務に疲れ果て、21年にインターン先のブルワリーに「帰ってきた」。広報業務を任され、「多彩なカルチャーが入り交ざる」震災後の福島で「新しい風を吹かせたい」と張り切る。

県東部の南北に山々が連なる阿武隈地域の中央、田村市都路町にあるビールメーカー「ホップジャパン」が営む「ホップガーデンブルワリー」。原発事故の避難指示解除から6年後の20年にオープンし、冷涼な気候を生かして自社栽培したホップを原料にクラフトビールを醸造している。生ホップならではの清冽な香りと豊かな味わいが身の上だ。

震災当時は中学2年。学習塾に出かけようとして大阪府高石市の自宅にいた。記録は震度2だったが「びっくりするぐらい揺れた」。その時の感覚が生々しくよみがえった出来事が5年後、在学していた立命館アジア太平洋大のある大分県別府市で遭遇した熊本地震（16年4月）だ。友人と避難所の体育館で不安な一夜を過ごした。

所属していたボランティア団体に付いて多くの家屋が倒壊した熊本県西原村に向かい、ニーズ調査などに従事した。「東北は…福島はどうなってるだろう」。3年後、都内の企業に就職が決まっていたが、気がかりが高じ、根っからのビール好きということもあって、ホップジャパンのインターンシップに参加。同社は翌年のブルワリー開業を目指し、地産のホップ栽培を中心とする持続可能な循環型のビジネスモデルを描いていた。

求人サイトを運営する東京の会社に勤め始めると深夜残業を余儀なくされ、終電で帰宅する日々が続いた。1年が過ぎ、心身を病んだ。休職か、転職か、実家に戻るか―。岐路に立たされていた21年春、都路のブルワリーで働く人から誘われた。

「今度、食べ物や雑貨を売るマルシェをやるから遊びに来ない？」。これが「突破口」になった。自然の中でのびのびと過ごしたかつてのインターンで、自らの存在意義を実感した幸せな記憶をかみしめた。「ここで働かせてください！」。猛アタックが実を結び、2カ月後、晴れて社員に迎えられた。

酒文化で阿武隈盛り上げ

広報を中心にイベント企画や運営などの仕事をこなし、22年10月にはビールの祭典、オクトーバーフェストを初めて取り仕切った。県内外の醸造所や飲食店など約30店舗を集め、秋の一日、約600人が都路に訪れてジョッキを傾けた。「各地で増えてきたビールやワインなどの酒造メーカーを線で結び、お酒の面白さで阿武隈地域全体を盛り上げていきたい」と意気込む。

当地に暮らして2年以上が経つ。古くから住む人たちは移住者を温かく迎え、地域をよりよくしようと積極的につながってくれる。原発事故から立ち直ろうとする福島には新旧住民を問わず様々な才能が集い、多くの人を呼び寄せる底力があると感じる。

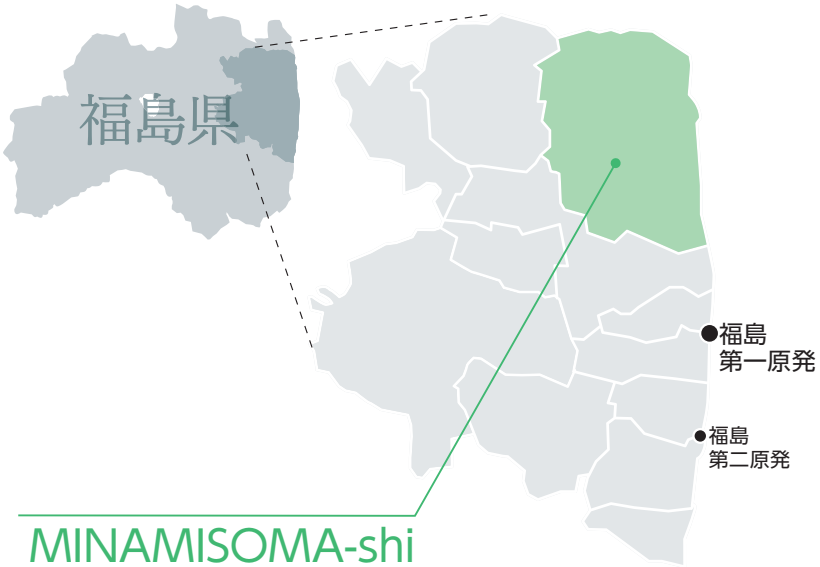
「新しい風が吹き、いろんなカルチャーが多彩に入り交ざっている。今の福島って一つのカントリー、国みたい」

パネル写真は自社栽培のホップ畑に立つ河本さん。

（2023年7月取材）

2016年5月、熊本地震のボランティアで訪れた熊本県西原村で。ニーズ調査や物資提供を手伝った

南相馬市



「野馬追」や波乗りで有名

2006年に原町市と小高町、鹿島町が合併して誕生した。浜通り北部に位置する。旧市町の区域ごとに地域自治区となっており、それぞれ原町区、小高区、鹿島区に移行している。国指定重要無形文化財の「相馬野馬追」やサーフィンの名所・北泉海岸で知られる。市南部の小高区全域と原町区の一部に出されていた避難指示は、16年7月に帰還困難区域を除いて解除。近年では福島ロボットテストフィールドが開設されるなど、技術革新にも取り組む。

面　　積	398.58 ㎢
住民登録人口（南相馬市）	56493 人（2023 年 11 月現在）
居住人口（旧避難指示区域）	4388 人（2023 年 10 月現在）
震災前の人口（旧避難指示区域）	14279 人（2011 年3月時点）
空間線量	毎時 0.05 マイクロシーベルト （小高区役所、2023 年 12 月測定） ※避難指示解除の目安は毎時3.8マイクロシーベルト

あの日からこれまで

市内にロボット開発拠点

地震は最大震度６弱を記録した。午後３時35分ごろに津波が襲い、９メートル超の最大波を観測。県内最多の636人が犠牲になり、市域の10％に当たる約41平方キロメートルが浸水した。

福島第一原発１号機が爆発した３月12日、小高区住民らは原町区などの避難所へ逃れ、15日以降、相馬市や伊達市など市外、新潟県など県外への集団避難が本格化した。４月22日、市の大半が警戒区域と計画的避難区域、緊急時避難準備区域に指定された後、2011年９月に緊急時避難準備区域が解除。12年４月に避難指示解除準備区域と居住制限区域、帰還困難区域に再編された。

13年４月、小高区役所が再開。16年７月には帰還困難区域を除いて避難指示が解除され、JR常磐線の小高―原ノ町間の運転が再開された。

17年４月、小高区の四つの小学校と中学校が区内で授業を再開し、小高商業高と小高工業高が統合して県立小高産業技術高が開校した。

19年には小高区に復興拠点施設「小高交流センター」が開かれ、原町区の北泉海水浴場が９年ぶりの海開きを果たした。20年、福島イノベーション・コースト構想による野外ロボットの開発実証拠点、福島ロボットテストフィールドが開所した。

南相馬市

吉田　邦子さん

（1952年　田村市都路町生まれ）
農業

原発事故くぐり抜け、農家に

市社会福祉協議会の職員として、高齢者の避難誘導や災害ボランティアセンターの運営に奔走した。自らも被災して避難所から支援先に通う日々を過ごす。2016年夏に避難指示が解除されると、所有する田畑で本格的に農業を始めた。小高区の直売所に収穫を並べ、若い移住者たちとの語らいを楽しむ。津波と原発事故をくぐり抜け、「命あるだけ丸もうけ」と朗らかに笑う。

あの日は小高川に臨む勤務先のデイサービスセンターにいた。「立たないで！」。激しい揺れに100人近い利用者がいた所内は騒然となり、とっさに大声を出した。1時間も経たないうちに川に目をやると、倒木や壊れた家屋の材木などのがれきが濁流に乗って押し寄せ、堤防を越えそうに。荒々しく遡上（そじょう）する津波だった。

利用者を連れて近くの生涯学習センターのホールに逃れた。翌12日午後のこと。ドーン。轟音が響き、驚いたお年寄りが騒ぎ出す。「きっと雷の音よ」とななだめていると、外にいた同僚の30代の男性が血相を変えて飛び込んできて、何度も口走った。「もう終わりです」と。

約17キロ離れた福島第一原発1号機が水素爆発を起こしたと知ったのは、13日に避難を促され原町区の市社協に移動してからのことだった。その後も車いすや認知症の利用者を他施設に託すために、苦労して放射線量検査を受けさせるなど困難が続いた。

自宅のある市南部の原町区小木迫（おぎさく）は第一原発から20キロ圏内に含まれ、隣接する小高区全域と共に警戒区域に指定された。「安全神話を植え付けられていた」。親族を頼って県内や埼玉県を転々としたが、4月、市社協に呼び戻され、9月まで原町区の石神第一小体育館の避難所に身を寄せながら、各避難所の状況把握やボランティアセンターの運営に尽力した。

12年4月に避難区域が再編され自宅への立ち入りが可能になると、すぐに浴室のボイラーを修理。入浴と夕食のためにアパートから毎日通っては、仕事疲れを癒やした。ひたすら、住み慣れた家が恋しかった。

「命あるだけ丸もうけ」

29年間勤めた社協は13年に退職した。16年7月の避難指示解除後に自宅周辺の除染が進み、農業に本腰を入れる。土地を入手して家を建てたのは04年のことだ。初めて来た時にピンときた。「ここなら絶対、間違いない」。後方の小高い山に神社が立ち、見守られているようだった。いつかグループホームを開いて、入居者と一緒に耕作できればいいな―。そんな望みも「原発事故で夢になって終わった」。

畑の収穫は週4日、小高区の復興拠点施設内にある直売所「小高マルシェ」で販売する。化学肥料を使わず、主に夏はナスやトウモロコシを、冬にはハウスで葉物などを育てる。移住者らお客さんたちとの触れ合いが楽しみだ。「どこから？って必ず声を掛けるようにしてる。（町に）若い人がどんどん入ってきてほしい」

外から「被災地」と呼ばれても「今まで住んでた場所だし、余分なストレスをためることなんかない。くよくよしてんな、命あるだけ丸もうけだべって、みんなにも言うの」と意に介さない。

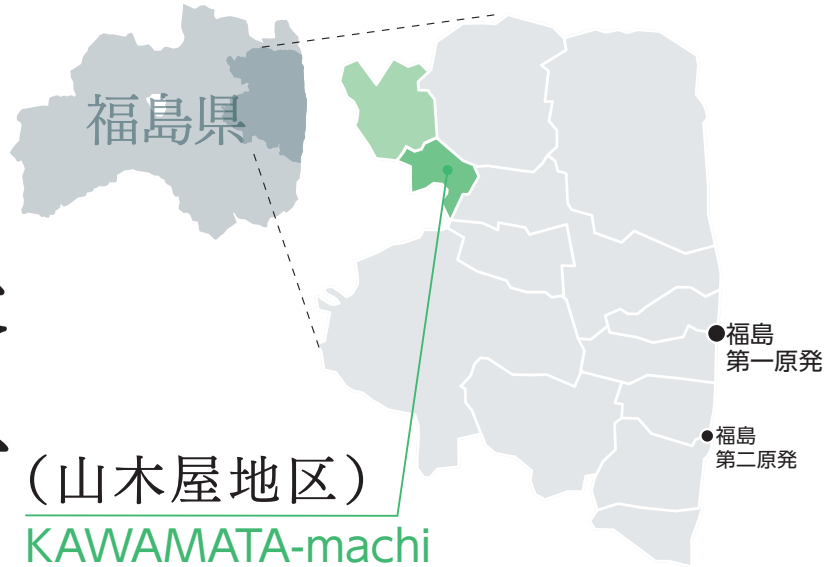
パネル写真は自宅裏の畑でつややかに実ったナスを手に取る吉田さん。

（2023年8月取材）

2013年、市社協の同僚と共に（左から2番目が吉田さん）

川俣町（山木屋地区）

KAWAMATA-machi



絹織物で栄える

1955年、1町7村が集まって川俣町となる。中通りに位置し、伊達郡に属する。山間の山木屋地区は町の南東に位置する。町は古来、絹織物で栄えた「絹の里」として知られる。原発事故で山木屋地区に避難指示が出され、2017年3月に解除。特産品に県ブランド認証の地鶏「川俣シャモ」などがあり、新たに復興を象徴する花として土壌を使わないアンスリウムの栽培にも取り組む。

面　　積（川俣町）	127.70 ㎢
住民登録人口（川俣町）	11197人（2023年11月現在）
居住人口（山木屋地区）	330人（2023年12月現在）
震災前の人口（山木屋地区）	1252人（2011年3月時点）
空間線量	毎時 0.10 マイクロシーベルト （山木屋小学校・中学校、2023年12月測定） ※避難指示解除の目安は毎時 3.8 マイクロシーベルト

あの日からこれまで

17年に全面避難解除

地震は震度6弱を観測。公共施設では老朽化した町役場本庁舎や福祉センターなど3棟が全壊判定を受けた。住家や商店の全壊は62棟に上る。災害対策本部は近隣の保健センターに設置。原発周辺自治体からの避難者を受け入れ、最も多い時で6千人を超えた。

原発から30キロ圏外の町に国や県からの避難指示はなく、4月になってから年間放射線積算量が20ミリシーベルトを超えるとして、山木屋地区に計画的避難区域が設定された。約1200人の地区住民は町内外の公共施設や旅館などに一次避難した後、町内の農村広場・体育館仮設住宅や借り上げ住宅、県内外に逃れた。

同地区は2013年8月に避難指示準備解除区域と居住制限区域に再編された後、17年3月、全ての避難指示が解除。同年7月に行政サービス窓口を併設する復興拠点商業施設「とんやの郷（さと）」が開業し、翌年には公民館の再開や小中一貫校の開校を果たした。

震災で甚大な被害を受けた町役場庁舎は13年に解体され、16年11月に新庁舎が開庁した。

21年3月には東京五輪の聖火リレーがとんやの郷と山木屋小中学校の間を走った。

語らい処
やま

川俣町山木屋地区

紺野　まり子さん

（1954年 川俣町山木屋生まれ）
「語らい処　やまこや」女将（おかみ）

変わらないもてなしの心で

震災前の温かな触れ合いを再び―。原発事故の避難指示が解除された2017年、住民の憩いの場だった雑貨店を改装して夫と共にそばや特産の「川俣シャモ」を出す食堂を開業した。3年後からは地区で復活した香り高い「山木屋在来そば」を提供するようになり、手作りのおはぎや郷土料理を添えた看板メニューが評判を呼ぶ。地域に息づく変わらないもてなしの心と笑顔で、かいがいしくお客さんを迎える毎日だ。

あの日、山間の山木屋地区から約10キロ離れた町中に用足しに行った帰り、国道を運転中に地震が襲った。大縄跳びの縄のように激しく揺れる電線。落石を恐れ、コンビニの駐車場に逃げ込んだ。翌日の午後、家にいるとドーンという音が聞こえ、30キロ以上向こうの原発が爆発したと後で知った。

地区は計画的避難区域に指定され、町内の旅館や借家に一家5人で避難。家業の雑貨店は閉め、兼業する電気工事の仕事や義父母の介護に追われる日々を過ごした。17年に避難指示が解除され、帰還を前後して義父母を見送った。「さて、これから何をしよう」

震災前まで営んだ店は屋号を「杉田屋百貨店」といい、国道沿いで食料品や日用品、燃料など何でも商う万屋（よろずや）だった。買い物客をお茶でもてなして世間話に花を咲かせ、帰りの荷物がいっぱいになれば車で家まで送ってあげた。ふと、その時分を懐かしく思い出した。初めは「地域の人たちが気軽に集まってお茶を飲む場所でも」と考えていたが、夫と相談を重ねるうち、食堂を開くことに。

相馬から中通りへ塩や海産物を運ぶ「塩の道」の駅として、初代が大正から昭和にかけて、旅人に食事を用意した伝統もあった。新しい屋号「語らい処　やまこや」には、往時の思い出と「やまきや」ではなく「やまこや」と呼び習わされた合併前の村への郷愁が込められている。

在来そばが評判呼ぶ

地区では震災で栽培が途絶えた在来種のソバを復活させる動きが起こり、収量が安定した20年、農業を営む実家などから皮ごと石うすでひいたそば粉を仕入れ、十割そばを打って出し始めた。背景にあるのは来客を自家製粉のそばでもてなす地域文化だ。

「お客さんはあれも、これも食べたいはず」。ざるそばと共に、ブランド地鶏の川俣シャモの親子丼、根菜やこんにゃくを小さく角切りにして煮た郷土食「ざくざく」などをお膳に並べ、「こずはん」と呼ばれる農作業の間食になる大ぶりのおはぎを付けて定食にした。昼時には評判を聞きつけた多くの客でにぎわう。

避難先に定着したかつての住民を気遣う。「帰ってきたときに困るから」。20年には旅行者のほか、震災後に家屋を解体してしまった人たちの宿泊場所にと、食堂の隣にコテージを建てた。

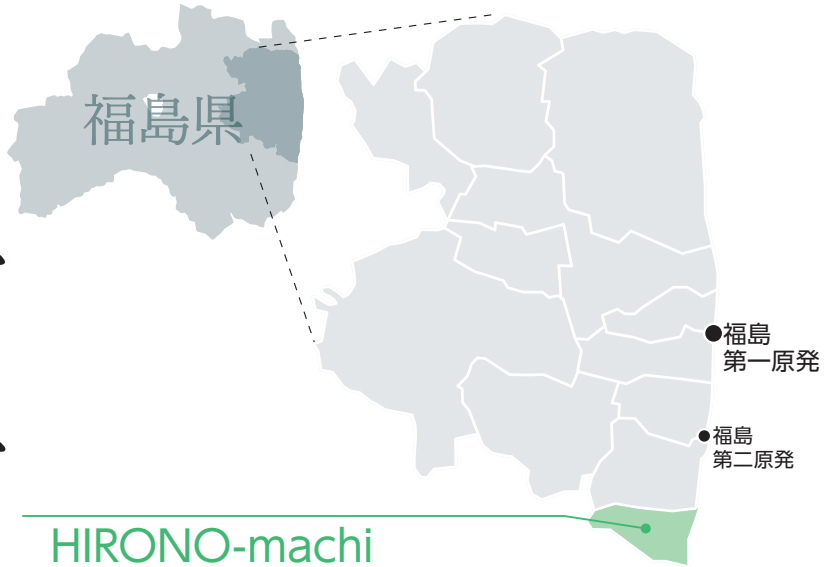
原発事故の影響で過疎化と高齢化が加速する現状を憂える。就農インターンなどで滞在する若者や移住者と接するたびに元気が出るといい、居住人口が300人ほどの地区が「よそから来てくれてもいいから、若い人も一緒に住める所であってほしい」と願う。

パネル写真は「やまこや」の店先で笑顔を見せる紺野さん。

（2023年8月取材）

2017年、食堂を開業して間もない頃に忙しく立ち働く

広野町



HIRONO-machi

温暖な気候と童謡の舞台

1940年、6カ村が合併した広野村が町制を施行し誕生。浜通り南部に位置し、双葉郡に属する。温暖な気候で、町役場近くに町営のミカン畑「みかんの丘」があり、山間部は童謡「とんぼのめがね」の歌詞となった情景が広がる。広野火力発電所が立地する。2012年3月の町長発令の避難指示解除後は、ＪＲ広野駅東側地区や県立中高一貫校の整備などが進められた。

面　　積	58.69 ㎢
住民登録人口	4634 人（2023 年 10 月現在）
居住人口	5430 人（同）
震災前の人口	5490 人（2011 年3月時点）
空間線量	毎時 0.09 ㎳シーベルト （町立広野幼稚園、2023 年 12 月測定） ※避難指示解除の目安は毎時 3.8 ㎳シーベルト

あの日からこれまで

順調に進む帰還、復興

大地震は震度６弱を観測。発生から約45分後に推定で高さ９㍍の津波が襲い、久保、本町両地区など沿岸部に大きな被害が出た。３人が死亡し、関連死は46人に上る（2023年８月現在）。全壊家屋は113戸。

福島第一原発１号機が爆発した翌日の３月13日、国からの情報が受信できない中、山田基星町長（当時）が全町民に避難指示。西に50㌔離れた小野町に役場機能を移し（翌月いわき市常磐地区の出張所へ）、同町や平田村、石川町、浅川町、いわき市、埼玉県三郷市に一次避難所、その後、ホテルや旅館に二次避難所を設けた。4月、緊急時避難準備区域に指定され、同年９月の解除後も町独自に避難指示を継続したが、翌2012年３月に解除した。

年を追って住民の帰還が進み、公設商業施設「ひろのてらす」のオープンや県内初の防災緑地の完成（いずれも16年）など、復興の槌音が響く。

12年８月、いわき市に避難していた広野小中が町内で再開し、15年４月にはユニークな教育方針で知られる県立ふたば未来学園高が開校。同高は19年に中高一貫校として再編された。

広野町

高橋　優子さん

（1974年 広野町生まれ）
「縁側の家」主宰、サーファー

波乗りで再び海とつながる

潮騒の聞こえる町で生まれ育ったかつての文学少女は、震災で絶たれた海とのつながりを取り戻そうとサーフィンを始め、とりこになった。奇しくも地理的に被災地との「境界」になった町に心身を解き放つ鍵を見つけ、2016年から誰もが文化、芸術に親しめる創造的な空間「縁側の家」を運営する。東北有数のサーフエリアである浜通り一帯。震災を経て移住者らも交えた新たなサーフコミュニティーが生まれ、「家」には地元サーファーをはじめ町内外の人たちが集う。

あの日は都心の勤め先にいた。東京が震源だと思ったほどの激しい揺れ。東京湾方面では火災の黒煙が立ち上っている。テレビを持たず、情報を得ようとかつての上司の家に身を寄せた。広野町に住む両親の安否が分からない。いとこの男性から連絡があり、実家近くの橋が津波で崩落したという。「終わった…みなしごになっちゃった」。両親の無事は後に判明するが、この時の「寄る辺なさ」をずっと抱え続けた。

東京の大学に進むまで、いつも海がそばにあった。家にいて川筋を上ってくる波の音。放課後にみんなで肩を寄せ合った砂浜。高校の頃、サーファーに憧れ、ボードを買おうと早朝のアルバイトに励んだこと。乗り込んだJR常磐線の始発電車で見た、太平洋に昇る真っ赤な朝日…。

原発事故の影響で、町は帰れない場所に。「海が恋しい」。ダイビング資格を得て静岡県伊豆半島に通ったが、潜水性中耳炎を患ってしまい、一度諦めたサーフィンの道に転向した。波にもまれながら、初めてボードに立てた瞬間の喜び。忘れかけていた身体の感覚がよみがえり、あの「寄る辺なさ」から解放されたと感じた。

ピアノとスポーツが得意で、太宰治や夏目漱石の小説を読みふける少女だった。高校時代のバイト代は高価なサーフボードの代わりにビデオ内蔵型テレビに化け、フランス映画や邦画のビデオを観まくった。大学では1920年代のドイツのキャバレー音楽史を専攻、ジャズや映画製作にも没頭した。

震災で広野は刺激的な町に

早期に避難指示が解除された広野町は「被災12市町村」の南端、入り口に位置し、「境界や身体性を考えるのにぴったりの刺激的な環境」になった。「独り占めするのはもったいない」。一方、福島が国内外で原発事故の文脈でしか語られなくなり、「すり替えられた私たちのストーリーを取り戻さねば」と痛感した。

町の古い空き家を改装して「縁側の家」を開き、「カルチュラル・プラットフォーム」と銘打ったのは、そんな理由からだ。旧国道沿いで築65年を経た、日当たりのいい縁側を持つ2階建ての木造家屋。両親の幼なじみである家主が手放そうとしていたのを、たたずまいに「ピンと来て」買い取った。気鋭の芸術家による震災などがテーマの作品を展示し、定期的に音楽ライブや映画鑑賞会を催す。22年から3月11日に波乗りをするイベントを行うなど、双葉郡やいわき市のサーファーたちの親睦の場になっている。

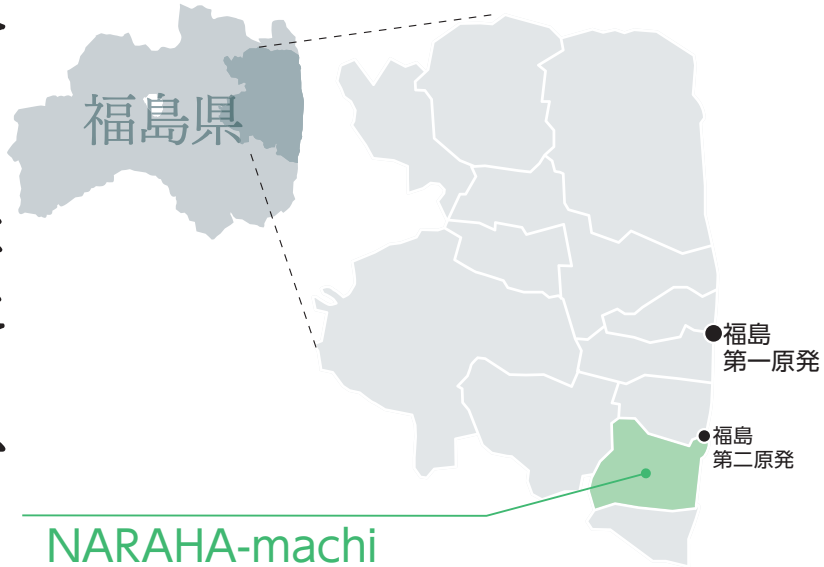
24年には、インド洋大津波（04年）で甚大な被害を受けたインドネシア・スマトラ島アチェのサーファーたちと交流する計画も温めている。「被災して『縁側の家』を始め、ここにサーフコミュニティーがあるからこそ、自分の軸が定まっているんです」

パネル写真は「縁側の家」の前に立つ高橋さん。

（2023年11月取材）

2018年、近所のサーフポイントで波を捉える

楢葉町



農業再生に注力

1956年に木戸村と竜田村が合併して誕生。浜通りの南寄りに位置し、双葉郡に位置する。サケの遡上（そじょう）やアユ釣りで知られる木戸川が貫流。福島第二原子力発電所の1、2号機が立地する。2015年に避難指示が全面解除され、町役場の近くに商業施設や公営住宅をまとめたコンパクトタウンを整備した。農業再生に向け、サツマイモ栽培など新たな町の特産品作りに力を入れている。

面　　積	103.64 ㎢
住民登録人口	6517人（2023年10月現在）
居住人口	4362人（同）
震災前の人口	8011人（2011年3月時点）
空間線量	毎時0.09㎛シーベルト（JR木戸駅、2023年12月測定） ※避難指示解除の目安は毎時3.8㎛シーベルト

あの日からこれまで

役場近接の新しい町

地震は震度6強を記録。高さ10㍍を超える大津波が襲い、13人が死亡、家屋約100戸が流失した。原発事故による避難指示が出た3月12日以降、町民はいわき市や友好都市関係の会津美里町などに避難。4月、原発から20㌔圏の警戒区域などに指定されたが、翌2012年8月に避難指示解除準備区域に再編され町への立ち入りが自由になった。

その後は避難指示区域で初となるスーパーやコンビニの営業再開（13年）や仮設店舗「ここなら商店街」の開業（14年）など商業活動が息を吹き返し、木戸川で4年ぶりのサケの稚魚放流（同）も実現した。

15年9月に避難指示が全面解除されると、町内初の災害公営住宅の完成（16年）や町立小中の再開（17年）、商業施設「ここなら笑店街」と隣接の交流施設「みんなの交流館　ならはCANvas」のオープン（18年）など、町役場にアクセスしやすい新しい町づくりが進んだ。

21年には、19年に再開したトレーニング施設「Jヴィレッジ」から東京五輪の聖火リレーが出発した。

楢葉町

深澤　諒さん

（1996年 秋田市生まれ）
コーヒー焙煎士、バリスタ

この町が香るコーヒーを

旅が好きだ。21歳の頃、世界一周旅行で訪れたノルウェーのフィヨルドを望む港町オーレスンで、自らコーヒー豆をひいてドリップした一杯が忘れられない。テント泊、嵐の過ぎ去った翌朝のこと。澄んだ青空に朝日がまぶしく輝き、フィヨルドの対岸がくっきりと見えた。それから6年、青年は今住む町の香りと味がするコーヒーをブレンドしたいともくろむ。

中学時代に通った学習塾で、缶コーヒーを傍らに置いて飲む男性講師の姿が「かっこいい」と憧れた。高校に入るとカフェ巡りを始め、上京して買い込んだ豆で初めてペーパードリップのコーヒーを入れてみた。両親のする見よう見まねだったが、素人なりに「すーっときれいに円を描くような」味だったと記憶する。

その頃、趣味のオンラインゲームを通じて、当時避難中だった大熊町出身の同い年の女性と知り合った。「今、実家には住めないんだー」「え、なんで？」「原発事故のせいで」―。

震災があったのは中2の3学期だ。自宅のある秋田市でも震度5強を観測。津波が押し寄せる映像には圧倒されたが、明日の食事の心配が先に立ち、原発事故についても「テレビの中の出来事」でしかなかった。この女性との巡り合いがあり、初めて震災を「リアルな体験」として捉えられるようになったという。

進学した秋田県立大の理系学部で自然生態系を学び、理科教諭を目指すが、「教育とは未来を考えること。日本の未来に携わるためには比較対象の海外を知らねば」と思い立つ。3年時に休学し、生まれて初めて国境を越えた。アジアや欧州など22カ国・地域を巡る10カ月に及ぶ旅の始まりだった。

2020年の卒業後、コロナ禍のあおりで長野県の地域づくり会社への就職がふいに。福島県会津の三島町の地域おこし協力隊に応募し、町観光協会に配属された。コロナ禍の中、交流サイト（SNS）などで観光PRをしたり、地域住民と触れ合ったりする日々。コーヒー焙煎の師と仰ぐゲストハウス経営の男性と出会って技術を磨き、この道で身を立てようと志す。

楢葉には挑戦できる環境が

「楢葉には面白い人と場所がある。来てみない？」。次の行き先を考えていた時、ずっと盟友関係が続く、今は浜通りで仕事をする大熊町出身の女性から声が掛かった。

22年5月、やりたいことに挑戦できる環境があると楢葉町に移住。古い旅館を改装したシェアハウス兼食堂に住み込んで働き、週末などに浜通り各地でイベントがあれば、ハンドドリップコーヒーの店を出す。名刺には「のみものをつくるひと」と記す。目標はこの地で焙煎所を営むことだ。

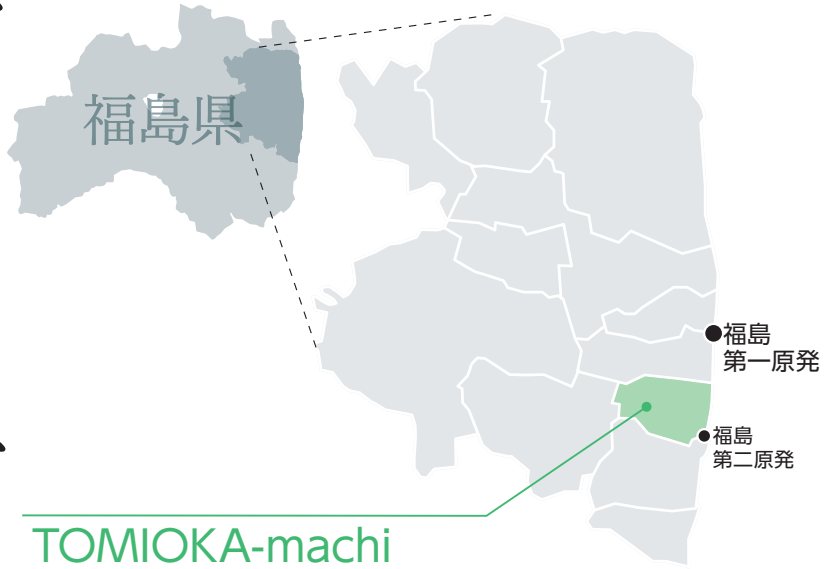
「散歩で出合った楢葉の紅葉が好き。季節の移り変わりとか何気ない日常とか、いつか、この町での僕の経験を落とし込んだコーヒーを焙煎やブレンドで表現できれば」

パネル写真はお気に入りの散歩コースという岩沢海水浴場で。海沿いに広野火力発電所（広野町）がそびえ立つ。

（2023年5月取材）

2017年、世界一周旅行の途上、モロッコのサハラ砂漠の町メルズーガで友人たちが寄せ書きを記した日の丸を掲げる深澤さん

富岡町



TOMIOKA-machi

郡の官庁集中した歴史

1955年に富岡町と双葉町が合併し、現在の町が誕生。浜通り中央部に位置し、双葉郡に属する。明治から昭和の時代を通して同郡の中でも官公庁の集まる町に。福島第二原発の３、４号機が立地し、ＪＲ常磐線富岡と夜ノ森の両駅を中心に市街地が形成されている。2.2㌔に及ぶ夜の森地区の桜並木が有名。2017年に町域の大半で避難指示が解除され、商業施設や小中学校が再開するなど、復興が進む。

面　　積	68.39㎢
住民登録人口	11542人（2023年12月現在）
居住人口	2298人（同）
震災前の人口	15830人（2011年3月時点）
空間線量	毎時0.13㎛シーベルト （町文化交流センター、2023年12月測定） ※避難指示解除の目安は毎時3.8㎛シーベルト

あの日からこれまで

復興拠点の避難解除進む

地震は震度6強を観測。仏浜、毛萱（けがや）、小浜、富岡駅前の各地区に最大で高さ21㍍の津波が襲い、24人が死亡、127戸が全壊・流失した。翌３月12日朝に川内村などに避難を開始したが、福島第一原発の過酷事故を受け、16日に同村民と共に郡山市の多目的ホール「ビッグパレットふくしま」に移った。

４月、全域が原発から20㌔圏の警戒区域に指定され、翌月に避難先の郡山市やいわき市に応急仮設住宅を整備。町立小中校も9月になって三春町で再開せざるを得なかった。警戒区域は2013年３月、避難指示解除準備区域と居住制限区域、帰還困難区域に再編された。

17年４月に面積の８割以上に当たる避難指示解除準備区域と居住制限区域の設定が解除。これに先立ち、町内初の災害公営住宅の完成や複合商業施設「さくらモールとみおか」の開業があった。18年４月、町内で町立小中学校が再開した。

23年４月に帰還困難区域で除染を先行して進める特定復興再生拠点区域（復興拠点）の夜の森地区などで、同年11月には同区域の小良ケ浜、深谷両地区の共同墓地や道路などで、それぞれ避難指示が解除された。

富岡町

畠山　侑也さん

（1996年 富岡町生まれ）
町役場職員

町思う若者を発掘したい

生まれ育った家は解体されてもうない。跡地に立てば、夕暮れまで父親とキャッチボールをした少年の日を思い出す。5カ所を転々とした避難生活、念願のプロ球団入り、そして故障による引退…。先輩の誘いで町役場に勤めて4年が経つ。居住人口が震災前の2割に満たない町の移住・定住促進事業を担当し、「富岡で活躍してくれる人を一人でも多く増やしたい」と意気込む。

中学2年の3月。翌日の野球の試合に備えて練習しようと、自宅でジャージーに着替えた直後、大きな揺れに襲われた。町は翌朝、隣接する川内村への避難を呼び掛け、両親と祖父母、弟、親戚ら8人で同村の祖母の生家に向かった。原発は過酷事故を起こし、そこから20キロ圏内を含む村にもいられなくなった。いわき市の避難所や父の郷里・秋田県横手市などを経て、再びいわき市へ。事態の深刻さを理解できず、「一日一日をただ淡々と過ごしていた」。

高校で野球部だった父は息子の物心がつく時分から技を仕込んだ。庭にはバッティングネットが張られ、自宅前の道はキャッチボールの空間になった。中学では相双地域（相馬、南相馬両市と双葉郡）の全市町村から選手の集まる硬式チームに入り、めきめきと腕を上げた。サードを守り、強打者として鳴らす。

避難中に進学したいわき市の高校、千葉県の大学でも野球に明け暮れた。「若いうちしかできない。どうせならプロに」。大卒の2019年、約500人が集まった独立リーグの合同トライアウトで25倍の難関を突破、地元の福島レッドホープス（郡山市）に1位指名で入団を果たした。

ところが、最初のキャンプで以前から痛めていた右肘を完全に壊してしまう。シーズン中は代打や指名打者でしのいだが、1年で引退を決意。いずれセリーグかパリーグで活躍しようとした夢はついえた。そんな時だった。野球仲間だった町役場の先輩が声を掛けてくれたのは。「役場、受けてみたらどうだ？」。晴れて採用されると21年に企画課に配属され、町外から移住者を呼び込む施策に携わる。

双葉郡の官公庁が集まり、震災前に人口約1万6千人を数えた町は今、約2300人が住む。多くの家屋が取り壊され、原発の廃炉作業員ら単身者向けのアパートが立ち並ぶ。「もちろん人口は取り戻したい。でも、富岡に強い思いを持つ人たちをどれだけ発掘するかの方が大事じゃないか」

そこで、大学生らに町内企業などで活動してもらい、将来の就業や定住に期待する「地域協働型インターンシップ」のアイデアが浮かんだ。23年8、9月には町づくり団体などと連携して第1回が実現、県内外の学生6人が町観光協会や町産ワインの醸造所、運送会社で働き、学んだ。

「震災あったからこそ」

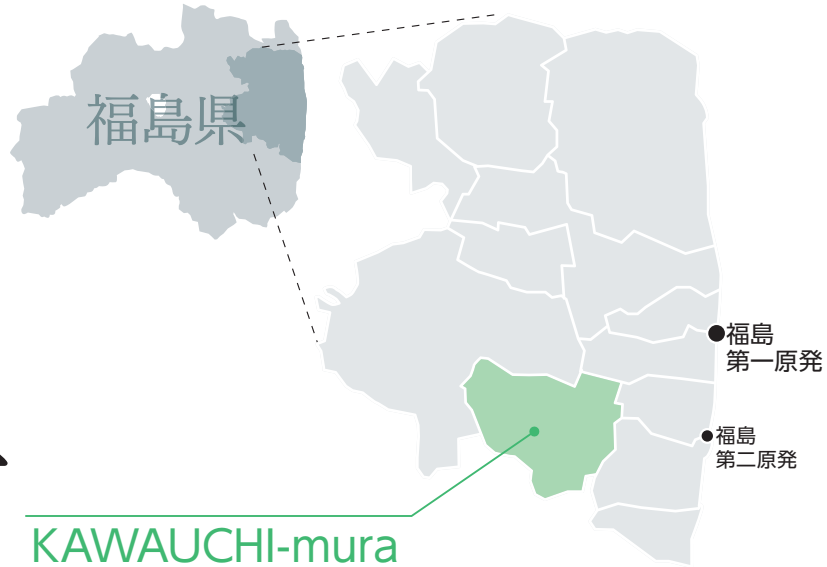
震災当時に福島第一原発の勤務だった父は蓄積線量の関係で新潟県の柏崎刈羽原発に単身赴任し、母はいわき市で新築した家に暮らす。自身は震災前からあった町内の祖父母宅から職場に通う。「震災があったからこそ富岡のことをきちんと考えるようになった。家族や町の皆さんに笑顔になってほしい」と日々仕事に向き合う。

パネル写真は自宅跡地の前で昔を懐かしみ、投球フォームをとる畠山さん。

（2023年5月取材）

2019年、福島レッドホープスの選手だった頃。右肘を痛め「夢と現実が乖離（かいり）した」

川内村



KAWAUCHI-mura

震災翌年に「帰村宣言」

1889年に上川内村と下川内村が合併し誕生。浜通り西部に位置し、双葉郡に属する。木戸川、富岡川、熊川の源流があり、西部には阿武隈高地最高峰の大滝根山がそびえる。モリアオガエルの繁殖地である平伏沼や、名誉村民の詩人・草野心平の蔵書を収める「天山文庫」があることで知られる。震災の翌年にいち早く「帰村」を宣言し、ワイン醸造など新たな産業にも取り組む。

面　　積	197.35 ㎢
住民登録人口	2298 人（2023 年 11 月現在）
居住人口	1902 人（同）
震災前の人口	3038 人（2011 年3月時点）
空間線量	毎時 0.05 マイクロシーベルト（村役場、2023 年 12 月測定） ※避難指示解除の目安は毎時 3.8 マイクロシーベルト

あの日からこれまで

8割帰還も過疎化深刻

地震は震度6弱を記録。翌3月12日、隣接する富岡町からの避難者を受け入れ、同町との合同災害対策本部を設置。村は東部が福島第一原発から20キロ圏の避難指示区域、20～30キロ圏は屋内退避区域になったが、郡山市の多目的ホール「ビッグパレットふくしま」などに全村で自主避難した。4月になって警戒区域と緊急時避難準備区域が設定され、9月には後者が解除された。

2012年1月、遠藤雄幸村長は「戻れる人から戻り、心配な人は様子を見てから」として「帰村宣言」を出した。4月に20キロ圏内が居住制限区域と避難指示解除準備区域に再編。さらに後者は14年10月、前者は16年6月に解除され、避難指示区域はなくなった。この間、「かわうち復興祭」（12年）や第1回「川内の郷かえるマラソン」（16年）が開催された。

21年には村立川内小中学園の開校や、遊休農地を活用した「かわうちワイナリー」の開業があった。イチゴ栽培など新事業の育成も進められている。村民の帰還率は8割を超えるが、過疎化と少子高齢化の問題に直面している。

Technologies progress.
Humanity must progress.
Science progresses.
Humanity must progress.

川内村

谷　信孝さん

（1955年 東京都生まれ）
「コミュニティハウスにじいろ」責任者

自己表現できる村の子に

あの頃、津波が押し寄せた宮城県石巻市でボランティアのお礼に歌ってもらった唱歌「故郷（ふるさと）」に涙があふれた。大企業を辞して数年後、福島大の被災地支援の職員として多くの人が古里を失った浜通り地方へ。2021年に任期を終えると、原発事故後の過疎に悩む村にできた多世代交流施設に迎えられた。「外部との交流が少ない子どもたちを地域ぐるみで育てる場に」。イベントやワークショップの企画・運営で、過去の豊富な経験を生かす日々だ。

震災当時は世界的な電機メーカー・ソニーの社員で、営業や商品企画などの部門でキャリアを積んだ。メディアは被災地の惨状を刻一刻と伝え、「テレビだとにおいがしない。何かしなきゃ」と奮い立つ。経団連が会員企業に募ったボランティアで5月下旬、約40人と共に宮城の被災地に入った。

石巻市のある高齢夫妻の家で床下の泥かきを終えた直後のことだ。妻が言った。「みんな流されてしまって、何もお返しするものがありません。だから、歌を歌います」

〈夢は今も巡りて　忘れ難き故郷―望郷の念を刻む唱歌「故郷」。思いがあふれ、涙が止まらなくなった。仲間たちもみな泣いていた。

「一寸先は分からない」。無常を覚えて震災の年に早期退職し、デイサービスセンターの施設長や放課後児童クラブなどを運営する会社の支社長を歴任。その後、福島大が被災地で「教育環境整備」を担当する専門員を求めているのに応じた。避難指示が出た12市町村の子どもたちに学ぶ楽しさや喜びを思い出してもらう任務だ。石巻で「故郷」に涙してから5年が経っていた。

大卒を前後して、教育評論家の故阿部進さんが主宰し自然の中で子どもを育む「野生学園」（山梨県忍野村）で6年間働いた経歴もあり、得意分野だった。福島大うつくしまふくしま未来支援センター（当時）では、主に小中学校で「心と体を解放する」ワークショップや出前授業を企画、5年間で30に及ぶ事業を実現させた。

任期を終えた21年、仕事ぶりを見ていた川内村の教育長（当時）から声が掛かった。4月開校の村立川内小中学園に併設する多世代交流施設の運営を任せたい、と。この「コミュニティハウスにじいろ」は誰でも自由に立ち寄れ、地域文化継承の拠点や公民館としての機能も果たす。

「普通じゃないけど普通」

22年度は、村ゆかりの詩人・草野心平の偉業を子どもたちに知ってもらおうと紙芝居クラブを立ち上げたり、住民が持ち寄ったレコードを真空管アンプで聴く集まりを開いたりするなどして、延べ2千200人の来訪があったという。

村の子どもたちを見ていて思う。「人数が少なくて同じグループで育つため、結束が強い反面、村外に出た時に気後れしてしまって自己表現が苦手。『にじいろ』で内外の人と交流してもらい、地域と学校ぐるみで見守りたい」

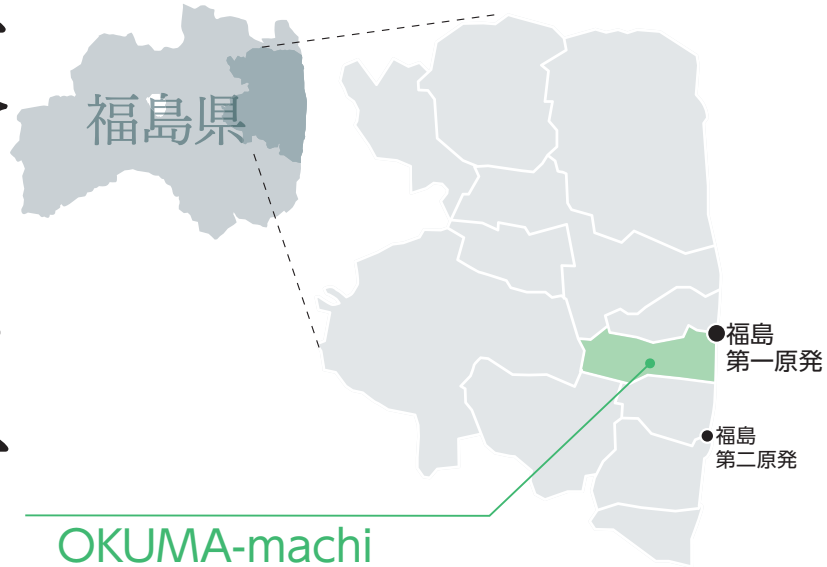
「被災地」と呼ばれることには抵抗がある。以前、ふたば未来学園高校（広野町）の女子生徒がウェブメディアの取材に答えた言葉をいつも胸に抱く。「福島は普通じゃないけど、普通です」

パネル写真は「コミュニティハウスにじいろ」のある川内小中学園の校舎内で。

（2023年6月取材）

震災から2カ月後、宮城県亘理町でボランティア仲間と肩を並べる谷さん（左から3番目）

大熊町



OKUMA-machi

第一原発１～４号機が立地

1954年に大野町と熊町村が合併して発足。浜通り中央部に位置し、双葉郡に属する。温暖な気候で、震災前はナシやキウイが特産だった。福島第一原発1～4号機が立地し、多くの町民が関連事業に従事していた。長く全町避難を強いられたが、2019年４月の一部避難指示解除後は、町役場や公営住宅を建設した大川原地区を拠点として復興に取り組み、JR常磐線大野駅周辺でも再開発が進む。原発周辺に除染廃棄物を保管する中間貯蔵施設が広がる。

面　　積	78.71 ㎢
住民登録人口	9969 人（2023 年 11 月現在）
居住人口	1112 人（同）
震災前の人口	11505 人（2011 年3月時点）
空間線量	毎時 0.09 マイクロシーベルト（町役場、2023 年 11 月測定） ※避難指示解除の目安は毎時 3.8 マイクロシーベルト

あの日からこれまで

新拠点地区に役場庁舎

地震は最大震度６強を記録した。高さ13メートルの津波が押し寄せ、夫沢１区、小入野、熊川の各地区で２キロ平方メートルにわたって浸水。12人が亡くなり、後に131人が関連死した。全壊家屋は316棟（いずれも2023年10月現在）。町に立地する第一原発１、３、4号機が水素爆発を起こし、炉心損傷の２号機からは大量の放射性物質が放出された。

町民は田村市などに逃れた後、４月、役場機能が移転した会津若松市などに二次避難を開始。町立小中学校も同市内で再開した。町は全域が原発20キロ圏の警戒区域指定を経て、2012年、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編された。

19年に帰還困難区域を除いて避難指示が解除。公営住宅が立ち並び、新たな拠点となる町南端の大川原地区で役場新庁舎が業務を開始した。20年のJR大野駅周辺に続き、22年に隣接する下野上地区の特定復興再生拠点区域（復興拠点）の避難指示が解除。町は商業施設や住宅の整備を進める。

23年には大川原地区で義務教育学校や認定こども園が一体となった町立「学び舎　ゆめの森」がスタートした。

NEW ZEALAND

大熊町

ブケ・エミリーさん

（1988年 フランス・ブルターニュ生まれ）
農業、イラストレーター

「別の電車」が動き始めた

震災の翌月、フランスから東京に移り住んだ。都会暮らしに疲れ、会津を旅して、自然の美しさや人々の温かさに一気に魅了された。民芸品「赤べこ」の自作イラストで福島の魅力を発信しながら、県内で引っ越しを重ね、現在は大熊町で子ども時代からの夢だった農業を営む。フランス菓子に使われるキイチゴや野菜を無農薬・無肥料で栽培し、人生で乗り込んだ「別の電車」に心を躍らせる。

原発事故からわずか1カ月後の日本行き。両親は反対し、不安は募ったが「チェルノブイリ（原発事故）よりましだろう。東京なら大丈夫かな」と機上の人に。2008年に初来日して歩いた「ピカピカした」街は、計画停電の夜に沈んでいた。

東京の後に横浜に住み、フランス語講師をして生計を立てた。日常生活の中で疎外感を覚え、日本語もうまく話せずストレスがたまっていった。そんな18年夏のこと。福島市出身の生徒の勧めで会津地方を訪れ、渓谷に奇岩が並ぶ「塔のへつり」（下郷町）や、多彩な青をたたえた湖沼群「五色沼」（北塩原村）の美しさに息を飲んだ。何より、自分を「ガイジン」扱いせず、気軽に声を掛けてくれる人々の優しさが心に染みた。

この旅で赤い牛をかたどった張り子の民芸品、赤べこと出合い、福島のよさを世界に広めたいと、パリの美術学校で培った腕前とセンスでかわいらしいイラストにした。交流サイト（SNS）などで作品を発表すると評判を呼び、会津との縁も深まって21年2月、ついに会津若松市に移住する。

イラストの仕事で、双葉町の復興のシンボル「双葉ダルマ」を描いたキャラクターを手掛けたことをきっかけに双葉郡の各町を訪れた。この「双葉だるまちゃん」には、動き回って「双葉を発信できるように」手足がある。双葉町の稲荷神社では、樹齢千年以上とされる神木「前田の大杉」（県指定天然記念物）を目の当たりにしてインスピレーションを受けた。

無農薬・無肥料の農業志す

浜通りの豊かな自然に触れて、種から野菜を育てた幼い頃を思い出し、この地で農業をしてみたいという気持ちがむくむくと湧き起こった。いわき市に引っ越して準備を進め、条件が整った大熊町での就農が決まった。23年2月に転居し、震災の影響で休眠していた1・7㌶の耕作地を借りて、キイチゴ類やジャガイモなどの野菜を育てる。農薬や肥料を全く使わない、自然環境や生態系に配慮した農業を志している。

福島に暮らしてからの歩みを、縁が重なって「別の電車に乗って動き始めた」と表現する。面積の大半で避難区域が設定されながらも急ピッチで再開発が進む大熊町について、いきなり訪ねてきたフランス人から「フェイクだ」と心ない言葉を浴びせられ、傷ついたこともある。

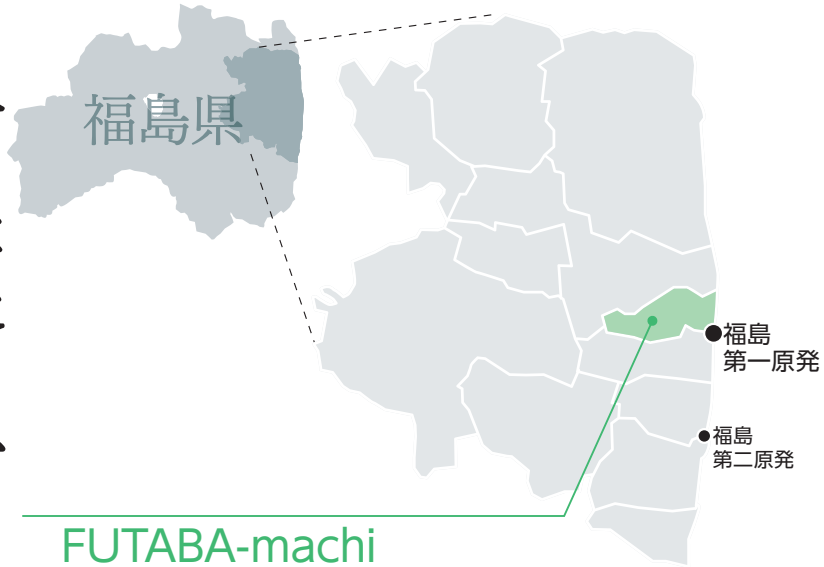
「だけど、元々大熊に住んでいた人たちは戻りたいから戻ったし、私たちはここが好きだから、やりたいことがあるから住んでいる。それでいいんだと思います」

パネル写真は自らのジャガイモ畑に立つエミリーさん。「全ての存在に意味がある」との考えから雑草もなるべく駆除しない。

（2023年5月取材）

2018年夏、南会津郡下郷町でかやぶき屋根が並ぶ大内宿を訪れた。この旅行で福島の魅力に取り付かれたという

双葉町



FUTABA-machi

戻れない避難住民

1951年に新山町と長塚村が合併して標葉町（しねはまち）となり、56年、双葉町と改称した。浜通り中央部に位置し、双葉郡に属する。福島第一原発の５、６号機が立地し、除染廃棄物保管の中間貯蔵施設が取り巻く。江戸時代から続く新春恒例の「ダルマ市」や勇壮な「標葉せんだん太鼓」などで知られる。全町避難を余儀なくされ、22年にJR常磐線沿線などの特定復興再生拠点区域（復興拠点）の避難指示が解除されたが、震災当時の住民のほとんどが今も町外に逃れている。

面　　積	51.42 ㎢
住民登録人口	5450 人（2023 年 11 月現在）
居住人口	101 人（同）
震災前の人口	7140 人（2011 年3月時点）
空間線量	毎時 0.17 マイクロシーベルト（双葉中学校、2023 年 12 月測定） ※避難指示解除の目安は毎時 3.8 マイクロシーベルト

あの日からこれまで

双葉駅東西で町づくり

地震は震度６強を観測し、大津波で海沿いの浜野、両竹、郡山の各地区で３平方キロメートルが浸水。家屋103棟が全壊した。21人が犠牲になり、関連死は181人に上る（2023年11月現在）。

住民は川俣町を経て、さいたま市のさいたまスーパーアリーナ、さらに埼玉県加須市の旧騎西高校などに避難。町は2011年４月に警戒区域に指定され、翌12年５月、避難指示解除準備区域と帰還困難区域に再編。11年７月以降、福島市や会津若松市、いわき市などに応急仮設住宅が整備された。町立小中学校は14年にいわき市で再開し、現在も仮設校舎で授業を続ける。

20年に町東北部の避難指示解除準備区域の避難指示が解除されるのに合わせ、中野地区に産業復興拠点を整備。これまでに製造業や建設業、宿泊施設など約20社が誘致された。同年、隣接地に東日本大震災・原子力災害伝承館、町産業交流センターがオープンした。

22年８月、帰還困難区域内のJR常磐線沿線を中心とする復興拠点で避難指示を解除し、新しい町役場が双葉駅前で開庁。同駅西側に公営住宅を整備したり、東側に商業施設建設を予定したりするなど、新しい町づくりが進む。

双葉町

島　美紀さん

（１９７１年 埼玉県川越市生まれ）
「双葉町結ぶ会」副代表

普通に暮らしてこそ「復興」

あの双葉ダルマの故郷に住みたい―。原発事故直後、朝方に埼玉の国道を走るバイクが浜通りの「いわき」ナンバーだったことが忘れられず、深刻な風評被害にも心を痛めた。さいたま市で被災地を応援する特産品フェアを企画したことなどが縁となり、２０２３年春、福島第一原発が立地し今も面積の８割以上に立ち入れない双葉町に移住した。地元を愛する「普通のおばさん」を名乗り、当地の魅力を津々浦々に伝えたいと走り回る。

特産品フェアは震災から10年の21年３月、ＪＲ大宮駅東口にある当時勤務先だった交流施設「まるまるひがしにほん」で開かれた。主に避難指示が出されるなどした14市町村の食品や土産物を集めた。新型コロナの流行をよそに、福島県人や震災ボランティアの経験者、出張帰りの会社員など多くの人が来場した。

全町避難中だった双葉町からは、苦労して生産者と連絡を取り、顔に太平洋を表す青い縁取りのある独特の「双葉ダルマ」を出品。先行き不安なコロナ禍も影響してか、縁起物のダルマは仕入れた30個があっという間に売り切れた。

震災の頃は都内の一流ホテルなどで接客の仕事をしていた。埼玉県春日部市の自宅から車で出勤途中、直前を男性２人乗りの中型自動二輪が低速で走っていた。ナンバープレートには、被災した双葉郡８町村を含む「いわき」とある。「えっ、夜通し走って避難してきたの？」。後ろの人がくすんだ紫色のジャンパーのすそをひらめかせ、その光景が今も目に焼き付いて離れない。「遅いな。追い越したい」と思った自分を恥じた。

当時、結婚披露宴などで給仕をすると、メニューの端に決まって「福島県の食材は一切使っておりません」と記してあった。仕事帰りの駅前スーパーでは袋入り３個の県産トマトがいつも１００円に値引かれていた。「尊厳って人だけじゃなく、土地や作物にもあるはず。なんでこんなに傷つけられなきゃいけないの」。ひたすら悲しかった。

双葉ダルマの故郷に住んで

21年の特産品フェアが終わった後も足しげく浜通りに通い、そのたびに住民の人の好さや海が近い豊かな自然環境にどんどん魅了されていった。「息苦しい」首都圏を離れて当地に来ると、ストレスが消えた。ふと思った。「あの時売ったダルマの生まれ故郷に住んでみたい」と。

五十代を迎え、すでに独り立ちした娘と息子、夫に福島行きの「夢」を打ち明け、22年夏、まずは住環境の整っていた楢葉町に１人で引っ越した。23年４月に双葉町の町営住宅に転居。同年７月には町民同士の親睦団体「双葉町結ぶ会」を立ち上げ、副代表に就いた。都合さえつけば、浜通りの町の垣根を越えてイベントを手伝ったり、自ら楽しんだりして、「広報大使」よろしく、その様子を交流サイト（ＳＮＳ）に上げることに余念がない。

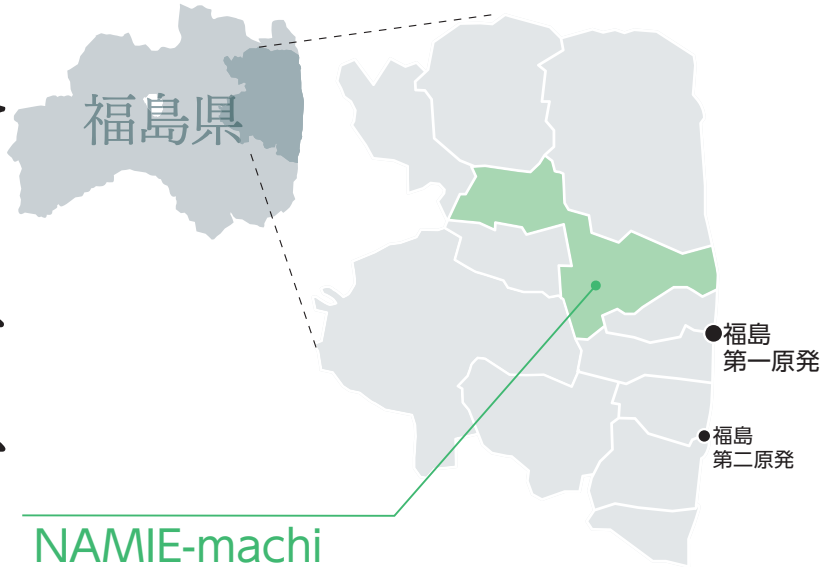
「私は地元の普通のおばさん。被災地って何か志を持ってないといちゃいけないような雰囲気があるけど、それだと本当の復興じゃないと思う。普通に引っ越して、普通に働いて暮らせる人がもっと増えてほしい」

パネル写真はＪＲ双葉駅西側の「駅西住宅」の集会場でくつろぐ島さん。

（２０２３年６月取材）

2020年、いわき市から浪江町まで約60キロをサイクリングした際、「道の駅なみえ」で。津波に流された同町請戸地区では荒涼とした景色に衝撃を受けたという

浪江町



NAMIE-machi

ＦＨ２Ｒやエフレイが始動

1900年に町制が施行され、その後、五つの村が合併して現在の町となった。浜通り北部に位置し、双葉郡に属する。伝統工芸品の大堀相馬焼や「なみえ焼きそば」などの特産品があり、請戸漁港で揚がる海産物「常磐もの」で知られる。全町避難を経て、2017年に居住制限区域などで、23年に特定復興再生拠点区域（復興拠点）の４地区で避難指示が解除。福島水素エネルギー研究フィールド（ＦＨ２Ｒ）が立地し、水素燃料の利活用に取り組むほか、JR浪江駅周辺の再開発や国の福島国際研究教育機構（エフレイ）の整備が進む。

面　　積	223.14 ㎢
住民登録人口	15206 人（2023 年 11 月現在）
居住人口	2130 人（同）
震災前の人口	21542 人（2011 年3月時点）
空間線量	毎時 0.08 マイクロシーベルト（道の駅なみえ、2023 年 12 月測定） ※避難指示解除の目安は毎時 3.8 マイクロシーベルト

あの日からこれまで

発展の一方、広く帰還困難

地震は震度６強を観測。沿岸の請戸、中浜、棚塩、両竹の各地区に津波が襲い、182人が死亡。関連死は443人に及ぶ（2023年８月現在）。

３月12日、山間の津島、室原など町内各地区に避難を開始。15日に二本松市に移動するなどした後、５月に同市や福島市などに整備した応急仮設住宅に入居した。町は原発20キロ圏の警戒区域と計画的避難区域に指定され、2013年４月、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編された。

17年４月、JR常磐線浪江駅周辺を含む東部の避難指示解除準備区域、居住制限区域が解除。町役場が現地で再開し、町内初の災害公営住宅「幾世橋住宅団地」も整備された。

20年３月に世界最大級の水素製造施設ＦＨ２Ｒが、23年にはエフレイが開所した。エフレイに連動した学園都市構想や、建築家・隈研吾氏の設計による浪江駅周辺の大規模再開発が今後進められる。

23年３月、室原、末森、津島、大堀各地区の復興拠点の避難指示が解除されたが、帰還困難区域は山間部を中心に町域のほぼ8割に及ぶ。

浪江町

尾崎　哲哉さん

（1981年 京都市生まれ）
「浜通り地域デザインセンターなみえ」スタッフ

被災地だから居場所がある

町で一部避難指示が解除された2017年、十数年ぶりに足を踏み入れ、「ゴーストタウン」と化した市街地に衝撃を受けた。一方、不思議なことに、その後も滞在するたびに持病の精神疾患が落ち着いた。「場所がいいのかも」。主治医の声に背中を押され、21年に関西から移住。原子力災害に「強い思い入れのない」一生活者として、「がんばらない復興」に思いをはせる。

初めて町を訪れたのは京都市で大学生だった二十歳ぐらいのこと。共に電車で旅した友人の祖母の家に泊まり、方言がほとんど理解できなかったのを覚えている。在学中にうつの症状が悪化し、京都の精神科医に通院するように。3・11の頃は仕事を辞めてデイケアで療養していたが、人間関係の悩みもあり「落ち込んでいて、それ（震災）どころじゃなかった」。

原発事故から6年後。仙台に旅行したついでに、「あの時の浪江はどうなってるだろう」と気になり、再開して間もないJR常磐線で南下して駅周辺を歩き回った。町は時が止まっていた。「建物は昔のままで生活のにおいは残っているのに、人の姿だけがなかった。人間が、原子力災害が生んだ景色がこれなのか」。背筋に寒気が走った。人ごとだった震災をリアルに感じた瞬間だ。

この日を境にたびたび町に足を運ぶようになり、滞在中は不思議と症状が出ないことに気付いた。「遠くに行くのがいいんですかね」。主治医に尋ねると「いや、場所っていうこともあるよ」という。父親と同世代の主治医は病の原因をあえて突き止めようとせず、どうしたら楽に生活できるかを一緒に考えてくれ、頼りになった。20年近く世話になった主治医が引退したのを機に、家族が暮らす大津市を離れ、浪江町に引っ越した。

隣の双葉町にある東日本大震災・原子力災害伝承館の受付係の職を得て、コワーキングスペースなどを併設する町の交流拠点「浜通り地域デザインセンターなみえ」でも管理や接客の業務に当たる。

なぜ、町は居心地がいいのか。「震災の影響で以前のコミュニティーがほころび、逆に僕の入り込む隙間がある。避難先から帰還した皆さんは、遠い滋賀県からよく不便な町に来てくれたと感謝してくださり、こんな自分が受け入れられたことがうれしい。ここが被災地だからこそ、僕はいられるんです」

「がんばらない復興」目指す

一方で、地域住民や行政、活動団体などの相互のつながりが薄いことが気がかりだ。町では浪江駅周辺の再開発や福島国際研究教育機構（F－REI、エフレイ）の整備など行政主導のトップダウンで大事業が進むが、合意形成に至る対話や説明が足りないと感じる。そんな傾向に歯止めをかけ、地域や組織に「横串を通すような」活動がしたいという。

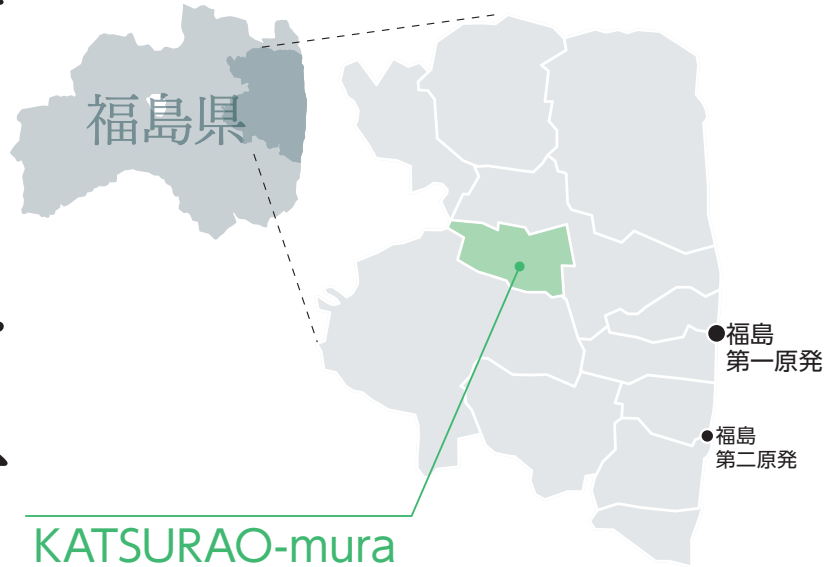
「復興を声高に叫ばず、自分にとって住みやすい町にしていくことが大切。まだ手探りだけど、意識しない、がんばらない復興が理想です」

パネル写真は町立浪江小学校の跡地に立つ尾崎さん。17年に訪れた時は校舎が残り、教室の中も原発事故当時のままだった。

（2023年6月取材）

浪江町への移住を決めた2021年3月に旅した富岡町夜の森地区の桜並木で。避難指示解除以前でフェンスが張られている

葛尾村



KATSURAO-mura

農畜産業の再生図る

1923年に津島・葛尾組合村から分離し、葛尾村が発足。浜通り西部に位置し、双葉郡に属する。村の85%を森林が占め、二つの河川が合流した高瀬川が流れる。震災後、全村避難を経て、2016年に一部を除いて避難指示解除となり、農業・畜産業の再生や生活環境の整備に取り組む。郷土食の凍みもちやシソ科のエゴマの生産地として知られ、近年では新たな特産品としてコチョウランの栽培のほか、羊肉や鶏肉のブランド化を図っている。

面　　積	84.37 ㎢
住民登録人口	1275 人（2023 年 11 月現在）
居住人口	464 人（同）
震災前の人口	1567 人（2011 年3月時点）
空間線量	毎時 0.09 マイクロシーベルト（村役場、2023 年 12 月測定） ※避難指示解除の目安は毎時 3.8 マイクロシーベルト

あの日からこれまで

交流館やキャンプ場開設

地震は震度５強を観測。家屋11棟が半壊の判定を受けた。

原発事故の情報が錯綜する中、３月14日、松本允秀村長（当時）が福島市のあづま総合運動公園への避難を決断、折からの降雨による被ばくを免れた。15日、約半数の300人が会津坂下町に移動し、後に柳津町や金山町などに分散した。4月、村は警戒区域と計画的避難区域に指定され、６月、三春町に応急仮設住宅が完成。役場機能も7月に同町に移った。

2013年３月、避難指示解除準備区域と居住制限区域、帰還困難区域に再編。4月に三春町に役場出張所の仮設庁舎が完成した。

16年4月、村役場は元の場所で業務を再開し、６月に避難指示解除準備区域と居住制限区域が解除。帰還困難区域の野行地区を除き、村域の大半で生活できるようになった。

17年には村内の商店や食堂が営業を再開し、恒例の「かつらお感謝祭」や自転車レースの第１回「ツール・ド・かつらお」が開かれた。

18年４月、村内で村立幼稚園と小中学校が再開。６月に復興交流館「あぜりあ」がオープンした。23年には村制施行100周年を迎え、震災の影響で休止していた村営キャンプ場「もりもりランド・かつらお」も再開した。

葛尾村

松本　昌子さん

（1978年 葛尾村生まれ）
村役場職員

「食」通してにぎわい作りたい

「最後の一人になっても村に住み続ける」。役場職員だった母親の言葉に背中を押され、現地で行政機能が再開した2016年、高校教諭の職を辞して転身した。進学のため古里を離れて23年ぶりの帰還。その分、震災で疲弊した村に貢献したいとの思いは人一倍強い。結婚、出産を経て、村役場で観光資源を掘り起こす仕事に携わる。農業や畜産業が盛んな村で、食肉などの特産品を通してにぎわいを作り出すのが目標だ。

震災を経験したのは福島市の福島東稜高で家庭科教諭だったころ。校庭の池がバシャバシャと波打ち、体育館のガラスに亀裂が入った。一方、葛尾村では当時の村長が原発の最初の水素爆発から2日後に全村避難を決断。村民約600人と共に福島市の総合体育館に避難してきた母松本まつ子さんに、毛布とポットに詰めたコーヒーを届けたことを覚えている。

新学期から初めてクラス担任を持つことが決まっていて、古里に寄り添う余裕がなかった。5年が過ぎ、大半の村域で避難指示が解除されることに。13年実施の意向調査では「戻りたい」と答えた住民が回答者全体の3割に満たなかった。1977年に隣の田村市都路町から嫁ぎ、「一人だけでも私は戻る」としきりに口にするようになったまつ子さんの姿を見て、自問した。「震災後、私は葛尾のために何をしてきたんだろう」

後ろ髪を引かれる思いで転職を決め、両親に内緒で村役場の採用試験を受けて合格した。避難指示解除を控えた16年4月、県中通り中部の三春町に機能を移していた役場は元の本庁舎に戻り、教育委員会に配属された。村立小中の再開に向けて奔走し、総務課でも仕事をこなした。その間、復興の手伝いを志して役場職員になった千葉県出身の夫との出会いや第一子の出産があり、人生は大きく転回した。

1年間の育児休業が明けた22年春から復興推進室で観光事業を担当する。山に囲まれた村は観光名所こそ少ないが、冷涼な気候で育つ新鮮な野菜や、震災後にブランド化した羊肉や鶏肉の質の高さが評判を呼ぶ。一方で、特産品を使った料理を提供する店が村内にほとんどないのが弱点だ。

特産鶏使用のカレー開発

最近、名物にできないかと自ら研究を重ね、レシピを開発した料理がある。村の養鶏場でハーブを餌に育てた鶏肉入りのカレー。大阪発祥とされる「スパイスカレー」をアレンジし、小麦粉のルーを使わずに15種類のスパイスを調合。鶏がらのだしに皮目を香ばしく焼いたもも肉と加熱調理用トマト「すずこま」などの地場野菜をふんだんに盛り込み、香り高い一品に仕立てた。「葛尾カレー」と名付け、公共の宿の食堂などで1日限定で出すこともある。

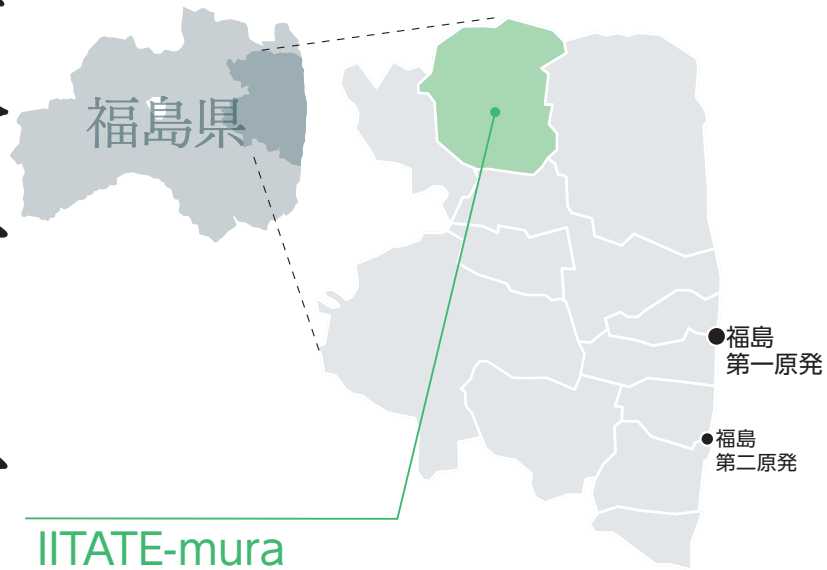
時間がゆったりと流れ、住民が親しみを込めて下の名前で呼んでくれる、この村の温もりと豊かな自然が好きだ。「被災地」と呼ばれるが、「だからこそいろんな人とつながって、新しい世界が広がった。葛尾村を知らない人たちにも知ってもらえた」。むしろ、未完のニュアンスがある「復興」の語感に引っかかる。「よく復興に向かっているとか言うけど、今は今で幸せです」

パネル写真は夫、両親と共に住む帰還後に建てた自宅の前でほほ笑む松本さん。

（2023年8月取材）

2014年3月、福島東稜高で初めて持った担任クラスの卒業式に臨んだ。「達成感にあふれた」という

飯舘村



IITATE-mura

「飯舘牛」復活目指す

1956年に飯曽村と大舘村が合併して誕生。浜通り北西に位置し、相馬郡に属する。阿武隈山系北部の高原地帯で、村の約75%を山林が占める。北に真野川、中央に新田川と飯樋川、南部に比曽川が流れ、流域に集落を形成している。震災後、全村避難を余儀なくされたが、2017年3月に長泥地区を除いて避難指示が解除。23年5月には同地区の特定復興再生拠点区域（復興拠点）などの避難指示が解かれた。基幹産業だった畜産業の再興やブランド牛「飯舘牛」の復活に向けて取り組む。

面　　積	230.13 ㎢
住民登録人口	4693 人（2023 年 12 月現在）
居住人口	1523 人（同）
震災前の人口	6509 人（2011 年2月時点）
空間線量	毎時 0.16 ㎳シーベルト（村役場、2023 年 12 月測定） ※避難指示解除の目安は毎時 3.8 ㎳シーベルト

あの日からこれまで

23 年、復興拠点の避難解除

地震は震度6弱を観測。福島第一原発の過酷事故後、南相馬市などから押し寄せた多くの避難者を受け入れた。3月15日、県が急きょ役場近くに設置したモニタリングポストの放射線量の測定値が急上昇。19日、約500人の村民が栃木県鹿沼市に緊急避難した。

4月22日、年間積算放射線量が20㎳シーベルトを超える計画的避難区域に指定され、5月15日に全村避難を開始。農作物の作付けが不可能になり、畜産農家は家畜を売らざるを得なくなるなど苦渋の決断を強いられた。

6月、福島市飯野の同市役所飯野支所に役場機能を移転。菅野典雄村長（当時）は避難した村民を励ます内容の「までいな希望プラン」を発表した。

2012年7月、帰還困難区域と居住制限区域、避難指示解除準備区域に再編。16年7月に役場機能が元の場所に戻り、翌年3月に避難指示解除準備区域と居住制限区域が解除された。16年9月には繁殖牛の実証飼育が始まった。

18年4月、帰還困難区域の長泥地区の一部が除染などを先行して進める復興拠点となり、23年5月、拠点外の長泥曲田公園と共に避難指示が解除された。

綿津見神社
綿津見神社

飯舘村

多田　宏さん

（1947年 飯舘村生まれ）
綿津見神社前宮司

避難せずとも後悔なし

全村が避難区域となり、誰もいなくなった後も動かず、独り神社を守り続けた。「ひとえに、戻ってくる氏子のため」。避難指示解除から6年。例大祭は復活したものの、村の居住人口は震災前の2割強の約1500人に過ぎず、氏子の避難先で神事を修めることもしばしばだ。数え77歳の喜寿を迎えた2023年、長男に宮司の座を譲った。「原発事故もコロナも乗り越えてやってきた」と言い、古里への愛着をいっそう深める。

村の鎮守として信仰を集める綿津見神社は、平安初期の大同2（807）年の創建。水神の闇於迦美神（くらおかみのかみ）や、清らかな空気を送ってくださるという木霊の五十猛神（いたけるのかみ）を祭り、多田家は江戸後期の文化12（1815）年から宮司を輩出する社家に任じられてきた。震災前は全村の7割強に当たる約1200戸が氏子だった。

あの日、社務所で神式葬儀の資料作りをしていた時に激しい揺れが襲った。東京電力福島第一原発は過酷事故を起こし、折からの風雨や雪に乗った放射性物質が山々を越えて約30キロ先の村に飛散。4月になると、積算放射線量が年間20ミリシーベルトを超える計画的避難区域に設定されてしまう。役場は全村避難を呼び掛けた。

それでも出ていかなかった。やむなく村を離れた人たちの平安のため、神前に祈りを捧げる毎朝の「日供祭（にっくさい）」が欠かせないと心に決めたからだ。「ここで神社を手放したら、氏子たちはどうなるのか」。ほかに残ったのは、体の不自由な高齢者を抱えたり特産の肉牛を育てたりする5世帯ほどだったという。

長男を相馬市に、妻と高齢の母を伊達市に送り、一人ぼっちの暮らしが始まった。ガスも電気も使え、地下水を引いて「不便なんてなかった」。食料は隣接する川俣町や南相馬市に車で買い出しに行って調達。孤独は感じず「かえって自由だった」と笑う。部屋や地点によっては高線量だったが、近づかないようにしてやり過ごした。

神社のある草野地区が居住制限区域に再編されていた2014年4月、3年に1度の例大祭を6年ぶりに挙行し、避難先にいた氏子ら約30人が駆け付けた。原発事故から3年を経て、祝詞で平和だった以前の村を懐かしみ、その土地と民を永遠に守ってほしいとの祈りを恭しく奏上した。

〈…往（ゆ）く先も見えずして村人の苦しみも窮（きわ）まりぬ。故（かれ）潰（つい）えたる穏（おだ）しき村、童らの声聞（きこ）ゆる村と行く末を照（てら）し給（たま）ひて村人の命をも守り給へと恐（かしこ）み恐みも白（まお）す〉

人心安定が宗教の務め

避難指示は17年4月、村域のほとんどで解除されたが、人口の回復ははかばかしくない。そこにコロナ禍が追い打ちをかけた。村民は避難先に定着してしまい、旧宅の氏神の祠を廃絶したり、避難先の家に新しく祠を建てたりする氏子もいて、複雑な思いだ。

神職生活は50年を超え、喜寿の節目となる23年に長男の仁彦（きみひこ）さんに後を継がせた。新型コロナウイルスの流行が落ち着いたこともあり、24年には中断している例大祭を再開したいという。

留まり続けたことを「後悔していない」と言い切る。「戻ってきた氏子が喜んでさえくれれば。人心を安定させるのが宗教の務めだと思うんだ」

パネル写真は創建1200年を記念し06年に再建された拝殿の前で。

（2023年6月取材）

2014年、拝殿で震災後初めての例大祭に臨む多田さん（右）と長男の仁彦さん